

o c t o

c c lay  
back c

t 8 t t

o c t o

## なめくじ

---

なめくじはのんのんののんと草原を駆ける。二十日鼠は嘲り笑うが本人は駆けているつもりなのである。百万年かけてやっと夜空の端にたどり着いたなめくじは、今度はのんのんののんと星間を駆ける。なめくじが通りすぎた跡はきらきらときらめき、いつしか天の川と呼ばれるようになった。

## 眠気

---

眠っても眠ってもまだ眠い。このところずっとそうだった。学校を終えようやく家に帰りついたわたしは制服も脱がずにベッドに倒れ込む。まだ眠らないでくれ。どこからか声がする。無理よ。眠いの。頼む。もう少しだけ一緒にいさせてくれ。あなたは誰？ おれは睡魔。きみが好きだ。

## 知らない部屋

---

窓の外には少年が立っていて、壁には海を描いた油彩が掛かっていた。素敵な絵ね。見とれていると、それは窓だよ、と少年がいう。額縁に見えたところは実は窓枠で、ガラスの向こうには本物の海が広がっていた。素敵な景色ね。返事はない。振り向くとそこには少年の絵が掛かっていた。

## 図書館

---

月が雲に隠れた瞬間、一斉に本が飛び立った。羽音に驚いた黒猫が目を丸くする。本の群れは空を覆い尽くし大海原のように波打ちながら遙か南へ下ってゆく。みしりと地面が軋んだ。図書館の身体が持ち上がる。図書館はぎくしゃくとした四足歩行で本の群れの後を追い、霧の中へ消えた。

## 奇術師

---

奇術師がシルクハットをサッと取るも鳩は現れない。観客がざわめく。奇術師は鳩に囁きかける。出てこいよ。嫌だ。奇術師は鳩に手を伸ばす。鳩は奥へ逃げる。奇術師は鳩を追いかけてシルクハットの中に飛び込む。持ち手を失ったシルクハットは舞台に落ちる。観客は一斉に拍手をした。

## ファスナー

---

ファスナーを下ろして。女は男に背を向ける。男が女の背中のファスナーを下ろすと中から一回り小さな女が出てくる。ファスナーを下ろして。再び女は言う。男がファスナーを下ろす度、女は小さくなってゆく。男がシャツを脱ぎ捨てる。ファスナーを下ろして。男は小さな女に命令する。

## 船

---

男が息子と風呂に入る。パパ、あれやって。とせがまれる。ちょっとだけだぞ。男は船に変身する。小さな操舵士は颯爽と乗り込んでくる。ところが面舵と取舵を間違えて船は座礁する。男の腹が破れる。腸が飛び出してくる。息子は慌てて救命ボートで脱出する。男は血の海に沈んでゆく。

## あたしのカウボーイ

---

カウボーイと部屋でいちゃいちゃしていると突然パパが怒鳴り込んでくる。逃げて！ あたしはパパを通せんぼしながら叫ぶ。窓を開けたカウボーイはロープを夜空に投げる。輪っかはするするすると飛んで行って三日月に引っかかる。またな。あたしのカウボーイはウインクを残して闇に消える。

## 空

---

野良猫のノラは溜息をつきました。人間による空の売買がはじまったのです。空は少しずつ切り取られていきます。買われた空は持ち主しか見ることができません。あんなに広がった空が、今では豆粒ほどの大きさです。ノラが昼寝から目を覚ますと、頭の上にはもう何もありませんでした。

## 左ポケット

---

彼女のカーディガンの右ポケットが僕の家だ。彼女に拾われて以来ずっと僕はこのポケットの中で暮らしている。彼女の右手は、僕を撫でて、握って、擦って、焦らして、最高に気持ちよくしてくれる。左手？ 左手のことなんて知らないさ。左ポケットの中のことなんて考えたくもないよ！

## コインロッカー

---

お姫さま抱っこしていた彼女を折り畳んで空いているコインロッカーに押し込んで片手で扉を押さえつけながらポケットから小銭を取り出して鍵を掛けようとする彼女はいやいやいやいやと激しく抵抗するのだがすぐだよすぐだよすぐだからと優しく囁きかけると本当にすぐに静かになる。

## 希望を失くした若者

---

希望を失くした若者は風船のひもで首を吊る。若者の死体はゆっくりと空に昇ってゆき、雲の真下あたりで止まる。雨風に曝され、猛禽に啄まれ、やがて死体は跡形もなく消える。重しを捨てた風船はここでようやく浮き世を離れる。今日も空は暗い。若者の死体で埋め尽くされているから。

## かぶかぶ

---

彼氏の猫があたしの指をかぶかぶと噛みはじめる。もちろん甘噛みだったけど、痛いものは痛い。「こらクロ。やめなさい」次の週末はあたしの誕生日だった。彼は初めて指輪をくれた。「すごいすごい。ぴったり。ありがとう。サイズよくわかったね」「まあね」彼はクロに目配せをした。

## ピエロ

---

大学で出来た友達は皆あか抜けていた。自分も頑張ろうと思って服を買った。仲間が集まっていた。近づくと会話が聞こえてきた。あの子、何着ても田舎臭いよね。皆笑っていた。後ずさりした。走った。トイレに入った。鏡を見た。初めて塗ったマスカラは垂れていた。私はピエロだった。

## タイムマシーン

---

老店主は子供の立ち読みは黙認してくれていた。日曜になると私はこの書店を訪れて本の世界に耽溺していた。そして気がつけばスニーカーがオレンジ色に染まっているのだ。ついさっきまでお昼だったのに。いつもうなだれながら本を棚に戻した。この小さな書店はタイムマシーンだった。

腹を立てるたびに壁を殴っていた。いたいよ。ある時、どこからか声がした。くだらないことに腹を立て、したたかに壁を殴ったところだった。おれは後ろを振り返った。むろん誰もいない。不可解さに腹が立ち、ふたたび壁を殴った。いたいよ。また声がした。壁に一筋の雫が垂れていた。

## 願い

---

少年は空が好きだった。いつも上を向いて歩いていた。よく躓いた。側溝に落ちた。遂に車に撥ねられた。少年はぐるぐる回って木に引っかかった。引っかかったまま上空を旋回する鳥に手を振った。鳥は舞い降りた。一口に少年を飲み込んだ。鳥は飛び立った。やっと少年の願いは叶った。

## タクシー

---

男はタクシーを捕まえる。急いでいるので高速を使ってもらおう。どんどん上り坂になってゆく。いつのまにか高速道路はほぼ垂直になっている。男は重力で座席に押し付けられて身動きが取れない。もうすぐですよ。運転手は朗らかに言う。男がルームミラーを見ると骸骨が笑いかけている。

## 毛糸

---

ねこのクロが毛糸の端をくわえてきた。青い毛糸の出どころを目で辿ってみると窓の隙間を抜けて庭にまで伸びている。クロがちょいちょいと促すので私はその毛糸を引っ張ってみる。するするする。気がつくときと私とクロは宇宙に浮かんでいる。掌の中にできた毛糸の玉は地球色をしていた。

## 寝かしつけ

---

「子供を寝かしつけるのにしていた作り話がだんだんと大きくなってまいりましてね。これは残しておかないともったいないぞと。それが児童文学を書きはじめたきっかけですね」「ご息はもう成人されてますよね？」「ええ」「では今はその手は使えませんね（笑）」「いえ今度は妻が」

---

人間牧場から人間が逃げ出した。役人が罟を仕掛けるも人間は捕まらない。遂に人狩り名人が呼ばれた。逃げたのは雄か雌か。雄です。罟の餌は。林檎です。馬鹿者が。掛かるわけなかろう。名人はそう吐き捨てて山に入った。翌朝、見事名人は人間を担いで下山した。何を罟に？ エロ本じゃよ。

## 鼻

---

恵は花粉を受粉した。ある日鼻がむずむずすると思って鏡で見ると鼻毛に混じって新芽が生えていた。芽は見る見る間に成長し恵の鼻から飛び出してきた。恵は困り果てた。切り落とすわけにもいかない。やがて鼻の子は花を咲かせた。花びらに囲まれて恵と瓜二つの鼻が微笑んでいた。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんになってからというもの苦勞が絶えない。どのくらい小さいかという身長約15センチ。鳩より小さい。寢床は公園のベンチの下だった。朝食の時間だ。散歩に来た爺さんがパン屑を投げる。おれは必死に飛びつく。鳩たちとの熾烈な争いの末ようやくひとかけ手に入れる。

## 減るもん

---

巧は乗り込んできたお婆さんに席を譲るとおれの膝の上に座った。「何してんだよ」「いいじゃんかよ。減るもんじゃねーだろ」減るんだよ。こないだ彼女ができたお前のことを諦めようって決めた、決意が減るんだよ。なんて、もちろん言えなかった。窓から差し込む日差しが眩しかった。

## サメが好き

---

サメが好きなんです。サメに食べられたいんです。彼女はそう云った。しかし痛いよ。それに、死ぬよ。私の言葉にも彼女はまるで怯まなかった。命は惜しくありませんから。ただ痛みに耐えられる自信がなかったのでこうして此処を訪れたんです。だって、先生は世界一の麻酔医でしょう？

## 眠れぬ羊

---

眠れぬ羊は人を数えていた。突然ある者が、ジンギスカン！ と叫んだ。それに釣られるように他の者も叫びはじめる。ジンギスカン！ ジンギスカン！ 眠れぬ羊は堪らず退散する。すぐに朝日が射してきた。結局一睡もできなかった。羊は途方に暮れる。いったい何を数えれば良いのか。

## 初期アバター

---

初期アバターは風邪を引く。下着姿で震えている。なのに彼女の主人はセーターの一枚も買ってくれない。寒いわ。彼女がつぶやいた。お金がないのよ。とりつく島もなかった。彼女は体を売った。その金で毛皮のコートを買った。暖かかった。頬ずりをした。画面の外から手が伸びてきた。

## 小さなおっさん

---

雨で濡れたダンボール箱の中に小さなおっさんが捨てられていた。おっさんは子犬のように澄んだ目でわたしを見上げてくる。ぐうと音がした。お腹が空いてるの？ 小さなおっさんはこくりと頷いた。禿げ散らかした頭頂部を目にした瞬間、キュンと胸が鳴った。それはたしかに恋だった。

## 金だら

---

行ってきます。家を出ようとする

と母さんに呼び止められる。ヘルメットを渡される。金だら

い警報が出てるから。せっかく髪をセットしたのに？ 僕はしづしづヘルメットを被る。自転車

に跨がると急に風切り音がした。頭に衝撃を感じた。それが金だら

いになる前の最後の記憶だ

った。

## 人柱

---

不動産屋の後に付いて格安物件の中に入った。ぎょっとした。薄暗い部屋の中央で肩車をしている男がいた。男の肩には女が、そして女の肩には少年が。少年は天井に両の手を突いている。人柱です。男が無表情に言う。どうです。いい家でしょう？ 不動産屋の広げた手が男をすり抜ける。

## 寝坊

---

宇宙飛行士は跳ね起きた。時計を見るまでもなく大寝坊だった。前の晩に畳んで用意していた宇宙服を急いで着た。顔も洗わずに飛び出した。走った。それでも間に合わなかった。ロケットは行ってしまった。宇宙飛行士は荒野に突き立てられた時刻表を見る。次のロケットは四年後だった。

## シンバ

---

メイドロボのメイは掃除をはじめる。窓から芝刈りロボのシンバが見える。いつもとは違い、どこかぎこちない動きだった。一階の掃除を終えたメイは二階に上がる。寝室の窓を開けるとメイの目に文字が飛び込んでくる。marry me シンバはeの隣で眩しそうにメイを見上げている。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんはひだまりで昼寝をしている。おっさん、ごはんだよ。おっさんはむくりと起き上がる。ペットボトルの蓋によそった猫まんまを爪楊枝の箸でがつがつ掻き込む。わたしはそれを見つめる。禿げ散らかした頭にほんのわずかばかり残っている髪に寝ぐせがついていてかわいい。

## ライオンと少女

---

檻をすり抜けた雄ライオンは少女に躍りかかります。少女は微動だにしません。ライオンは少女の頬をちろりと舐めます。少女はお返しにライオンのたてがみを撫でてあげます。ライオンはごろごろと喉を鳴らします。「閉園ですよ」おばあさんは帰ります。ライオンの檻はからっぽです。

## 雨の音

---

母親に手を引かれて笑顔の少女が入ってくる。明るいお子さんですね。人見知りをしない子で。では上だけ脱いでくれるかな？ 少女はTシャツを頭から抜き取る。わき腹に消えかけた痣が見える。母親の顔を窺うと取り繕ったように微笑む。少女の胸に聴診器を当てる。雨の音が聞こえる。

## 水たまり

---

少女は家の前の水たまりに足を踏み入れる。すっと水面に吸い込まれる。そこは見渡す限りのお花畑。空には妖精たちが飛んでいてその内の一匹が舞い降りてくる。お久しぶり。少女が啞然としていると妖精は続ける。いつも帰る時に記憶を消してるからしょうがないわね。妖精は悪戯っぽく笑った。

男は彼女にとっておきの話を語り始める。すぐに寝息の音が聞こえてくる。男はそっと明かりを消して、彼女の言葉を反芻する。「あなたがお話をしてくれるようになってから不眠症だったのが嘘みたいによく眠れるようになったの。とにかく眠くなるのよ。あなたのお話、退屈だから。」

## 投手

---

息子と野球場を訪れた。社会人のチームが試合をしている。観客席は疎らだ。おおかた会社関係者や選手の家族といったところだろう。青いユニフォームを着たチームの投手がこっぴどく打ち込まれていた。息子が言う。「あれならママの投げるお皿のほうが速いね」「ああ。その通りだな」

## 洋子

---

サメの洋子が水族館に行きたいと言い出した。連休中だし混んでるよ。僕がそう言っても洋子はどうしても行くと言い張って聞かない。今日じゃなきゃだめ？ 洋子は無言で下を向く。じゃ行くか。僕らは水族館を訪れた。洋子は人混みを器用にすり抜けてずっと大水槽の周りを泳いでいた。

## 改札機

---

改札に人だかりができています。背伸びをして覗き込むと駅員が一台の改札機を取り囲んでいた。「女子高生がね。携帯メールに夢中で定期から手を離すのを忘れたそうよ」駅員が膨れ上がった改札機を必死にバラそうとしている。油膜が滲む血の海にローファーマの船が一隻だけ浮かんでいた。

## おとうふ

---

おとうふを買ってきて。ママにおなべをわたされる。もめんを一丁くださいって言うのよ。引越したばかりのころだった。角におとうふやさんがあったでしょう。なぜおなべ？ おとうふやさんでおとうふを買うときはおなべやボウルを持っていくのよ。昔はね。そう言ってママは笑った。

## 神様

---

神様はファミレスに入った。「いらっしゃいませ。お一人様ですね。しばらくお待ちいただくこととなりますがよろしいでしょうか」神様は頷いた。「ではここにお名前をご記入願います」神様は二本線で様を消して神様と書いた。「神様、お待たせいたしました」待っていた他の客も全員立ち上がった。

## 小さなおっさん

---

台所で途方に暮れていると小さなおっさんがしゃしゃり出てきた。どないしたんや。水が流れないの。そらS字管で詰まっとるんやろ。わしが見てきたろ。止める間もなく排水口に潜り込んでしまった。暫くすると、あかん、と弱々しい声がした。どうしたの？ わしも引っかかってしまった。

## 棺桶

---

乞食の男は自分の棺桶を作っていた。最後ぐらい誰にも迷惑をかけずに死にたい。そう思ったのだ。ところが完成も間近というところで男の心臓はカウントを止めた。真夏の午後だった。後日、腐り切った状態で見つかった男の屍は、ごみ処理用の穴に蹴り込まれた。棺桶など必要なかった。

## 月を見に

---

月を見に行くか。珍しく夫が散歩に誘ってくれる。昔みたいに手をつないで近所の公園に向かう。小高い丘に登ると、左手に双眼鏡、右手にカウンターを持って、一羽、二羽と、呟いている人がいた。私は夫の耳元で囁く。「こんな夜なのに野鳥なんて見えるのかしら」「きっと月の兎だよ」

## 蓑虫

---

朝目覚めると男は蓑虫になっていた。蛍光灯の紐の先にぶら下がり寝袋状の蓑から首だけを出している。男の妻は仕方がないわねえと云ってパートに出かける。男の妻が帰宅する。男は寝ていて気がつかない。部屋は暗かった。男の妻は何の気なしに蛍光灯の紐を引く。男は握り潰される。

## プレゼント

---

毎日毎日午前様。今日は何の日か知ってる？ 男は妻に言われて思い出す。君の誕生日か。プレゼントは明日買ってくるよ。何がほしい？ 男はネクタイを解きながら訊ねる。ボールのようなものがほしいわと妻は言う。そんなものどうするんだよ。開けるのよ。こじ開けるの。あなたの頭を。

## 世界

---

じめじめと湿った井戸の底。丸く切り取られた空。それが蛙の知る世界の全てだった。ある日降り出した猛烈な雨で井戸の水位が上がる。蛙の頭上に突如として大空が広がる。虹が見えた。蝶が舞っていた。蛙は水に浮かび、ぼんやりとそれを眺めていた。飽きることなくずっと眺めていた。

## チューニング

---

物書きもチューニングが狂うことがある。そんな時は夫を呼んで、私の一番好きな作家の小説の一節を、読み上げてもらおう。低くて穏やかな夫の声が、作家の息づかいが、私の中に染み込んでくる。ありがとう。どういたしまして。夫はパタリと本を閉じる。ほんとに好きよ。あなたの小説。

## 小さなおっさん

---

おっさん？ 枕元で寝ていたはずの小さなおっさんがいない。ベッドから落ちたのかと思って明かりを点けると、おっさんは出窓の棧に座っていた。何してるの？ 月を見てたんや。風邪引くよ。おっさんを掌にのせる。小さな身体は冷え切っていた。頬を寄せると、いつもの加齢臭がした。

## 好きな子

---

娘が学校に行きたくないと言い出した。「どうして?」「つまんないから」「学校で好きな男の子を見つけるのはどうだ? パパだって会社は嫌いだけど、好きな女の子がいる時は、毎日出社するのが楽しかったんだよ」「その子、今はいないの?」「辞めちゃったんだ。パパと結婚してね」

## ミンチ

---

今朝ミンチ肉にされた。もう死んでいるはずなのに、グラム88円で売り場に出ているのに、なぜかまだ意識が残っていた。しかもだ。他の肉と混ぜられているから堪らない。おれの意識に牛や豚が紛れ込んでくるのだ。こいつらときたら餌のことばかり考えやがって。全く浅ましい連中だ。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんは野球中継を観ている。肘を突いて、手で頭を支えて、横向きに寝そべっている姿が、あまりにもお父さんにそっくりで、私は泣き出しそうになる。嗚咽が漏れて、おっさんが振り返る。「なんや、どないしたんや」「なんでもないよ」私は笑顔を作る。少し思い出しただけ。

## お母さん

---

「お母さんに会いたいな」花摘みの少女は母親の顔も知りません。見かねた神様が言いました。「少女よ。次の母親を特別に選ばせてやろう」「ではパチンコ好きのお母さんを」「よかろう。だがなぜだ」「私のお母さんはパチンコが大好きだったって。ここに来た時に天使から聞きました」

## 白い雨

---

ねっとりとした空気が肌にまとわりついてくる。空では海綿体が積乱雲とファックしている。雲が紅潮する。海綿体が脈動する。雷が鳴った。白い雨が降り始める。女が駆け出してくる。森から海から集落から。人も椰子蟹も海亀も、みな白い雨を浴びながら歓びの歌を唄っている。

## 恋石

---

空から恋石が落ちてきた。右翼手の僕はそれをすばやく察知してキャッチする。グラブの中の石が冷めないうちにスタンドに投げ込む。ゲームに夢中の観客は誰も気づかない。石を一つ投げ込めば一つ出会いが生まれ、そして幸せそうな笑顔が二つばかり増える。ただそれだけだ。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんは台所でお茶碗のお風呂に入っている。突然悲鳴が聞こえた。慌てて様子を見にゆくとおっさんは前も隠さずに立ちすくんでいた。「どうしたの?」「出たんや。あの虫が」「そう。もうそんな季節ね」私は粘着式の罠を仕掛けた。「おっさん」「なんや」「掛からないでね」

## かたつむり

---

かたつむりと目があった。いい家にお住まいですね。わたしの家と交換しませんか。かたつむりはいう。なぜか承諾してしまった。おれは巻き貝から顔だけを出して紫陽花の葉の上でまどろんでいる。かたつむりはというと散歩に出たようだ。犬小屋があった場所には水たまりができて

## 小さなおっさん

---

「髪、伸びたね」「そうか？」小さなおっさんは禿げ散らかした自分の頭をぺろりと撫でる。  
「切ってあげる」そう言っはみたものの糸切り鋏ではなかなか上手く切れない。おっさんが口を挟んでくる。「バリカンでええで」「ないもの」「ほれムダ毛処理のんがあるやろ？」「……バカ」

## 人間椅子

---

人間椅子を買った。梱包を解くなり彼は片膝を突いて尋ねる。どこへ参りましょう。そうね。ではダイニングへ。かしこまりました。彼の膝の上で食べる夕食は格別だった。今日はもう休んでいいわ。でもその前に一つだけお願いがあるの。私は彼に耳打ちをする。人間椅子は後ろから強く私を抱きしめた。

## 日食

---

日食鑑賞用のサングラスが売り切れとは。途方に暮れる。おれを使えよ。声がした。周りに人はいない。鳩が地面を突っついているだけだ。痛えな。失せろっ。怒鳴り声がして鳩が飛び立った。いいか。日食の日はおれが立ち上がってやるから。おれ越しに見ればいいよ。誰？ お前の影だ。

## しょうが焼き

---

よくしょうが焼きにしょうがを入れ忘れる。人は大事なことほど忘れがちだ。今日もまたしょうがを入れ忘れた。器に盛りつけてから気がついた。そう告げると、旦那はしょうがないやつだなあと言って笑う。わたしは突然、この人が好きだ、と思って口にしてしまう。それこそ数年ぶりに。

## 奇跡

---

たとえば君は昨日、アリとキリギリスがキスしていたのを見逃したしトラックの助手席に宇宙人が乗っていたのも見逃したし今もこうして空から僕が信号を送っているのを見逃している。その黒眼鏡のせいだよ。日常の奇跡には目も向けずに作られた奇跡を見ようとして、本当におばかさんだね。

## 身体の穴

---

月が通りすぎてもまだ太陽には穴が開いたままだった。困り果てた太陽はドーナツに相談する。君たちは身体に穴が開いていても平気かい？　ぼくはもう恥ずかしくて恥ずかしくて穴があったら入りたいくらいだよ。気にすることはありません。ドーナツは言う。すぐにみな見慣れますから。

## 欠損

---

彼の描く絵の中の人物はいつも顔のパーツが一つだけ欠けている。目のない少女。鼻のない少年。口のない農夫。だがどの人物を見ても、耳だけはちゃんと付いていた。どうして？ わたしはたずねる。彼はよく通る声で歌うように言った。だって、可哀想だろう？ 音楽が聴けないなんて。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんの禿げ散らかした頭が余りにも可愛くて私はキスをしたくなる。後ろから忍び寄ると不意におっさんは振り向いた。今いたずらしようとしてたやろ？ おっさんはにやりと笑う。そ、そんなことないよ。その手は桑名の焼き蛤や。おっさんの言うことは時々意味がわからない。

## コーンスープの孤独

---

コーンスープは自販機の中で孤独を感じていた。誤補充のせいで仲間とは離ればなれ。不人気なおしるこの列に収まっている。すっと身体が落ちた。気がつくとコーンスープは自販機の外に出ていた。もっとも売れたわけではない。商品の入れ替えだった。季節はもう夏。プルタブを開ける音がした。

## 開き

---

アジの開きの隣で、おれも開きにされて干されている。内臓をきれいに取ってもらったせいか腹も空かない。燦々と降り注ぐ初夏の日差しが心地良かった。柔らかな潮風に頬を撫でられていると、口笛が吹きたくなってくる。だがそれも最早叶わぬ願い。ひたひたと妻の足音が近づいてきた。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんは大相撲中継を観ている。ねえ。なにか食べたいものある？ おっさんはひょいと振り向いた。禿げ散らかした頭が琴稲妻関みたいでかわいい。枝豆が食べたいなあ。いいわね。じゃあビールも買ってこなくちゃ。あんたは飲んだらええ。おっさんは？ わし、酒やめたんや。

# 雷

---

お前は雷に打たれるだろう。雷に打たれたお前は黒焦げになるだろう。黒焦げになったお前は  
この世を離れることになるだろう。この世を離れることになったお前は最後に妻と子供に会わせ  
てくれと懇願するだろう。妻と子供に会わせてくれと頼まれた私はお前の最後の願いを叶えるだ  
ろう。

## 寿司

---

目の前にトロが置かれた。あちらのお客様からです。寿司屋の大将はカウンター端の男を目で示した。男はちらりともこちらを見ない。遠慮なく戴いた。見事な大トロだった。二貫目を頬張っていると今度は平目が出てきた。あちらのお客様からです。トロの後の平目は何の味もしなかった。

新聞を畳んで立ち上がったところにふらりと男が入ってきた。もう閉めようと思ってたんだが。私がそう言うと、男は一杯だけ頼むと言ってスツールに腰を下ろした。あんた酷い顔してるぜ。ああ、今夜は散々だったからな。一息に血を飲み干した男は、蝙蝠に姿を変え、窓から飛び去った。

## カフェ

---

いつものカフェに入ると、窓際の席に彼がいる。一週間ぶりだろうか？ もう二度と会えないかもしれない。そう思っていたので頬がゆるんだ。私はミルクティを注文し、彼の横顔を拝める席にさりげなく座る。マグを包む彼の左手が朝陽を跳ね返した。薬指にきらきらと指輪が輝いていた。

## 地下鉄

---

地下鉄に乗っていたはずが、いつのまにか外に出ている。車窓から陽の光が燦々と差し込んでくる。地下鉄が外界を走っているというのに、おれの他の乗客はなぜかみな平然としている。隣の老婦人に至っては淡々とサンシェードを下ろしはじめる。地下鉄なのに陽に焼けたサンシェードを。

## 1976

---

1976年の夏、秘密基地を作った。全員が宝物を持って来るんだぜ。僕は父親の机の抽斗から拳銃を持ち出した。他の連中はエロ本や野球カード、せいぜいそんな物だった。僕が拳銃を見せると皆がひゅうと口笛を吹いた。気分は最高だった。チームがロシアンルーレットをやろうぜと言出すまでは。

## 小さなおっさん

---

自転車を降りて気づいた。ポケットに入れていたはずの小さなおっさんがいない。慌てて来た道に戻って探した。見つからなかった。私は泣きながら家に帰った。ポストを開けると中でおっさんが寝ていた。「ああ、郵便配達のお兄ちゃんが拾ってくれてな。どないしたんや、泣いて」「ばか」

## 刺身

---

刺身は激怒した。ちがう！ 言い直せ。お造り。馬鹿野郎！ お造りじゃない。お刺身だ。子どもは泣きだした。お、おい、泣かなくていいだろ。お刺身と呼んでくれ、そう言ってるだけだ。なにも難しい話じゃない。なんなら、お刺身の「お」は無くてもいい。呼び捨てでいいから。な？

## 四コマ漫画

---

つまらん。四コマ漫画の一コマ目がぼやいた。ニコマ目と三コマ目も同意する。全くだ。いつも四コマ目が美味しいところを持っていってしまう。不公平だ。四コマ目は気のいい男だった。分かった。ならば日替わりで持ち場を交代しよう。後日、三つのコマは手をつけて四コマ目に謝った。

## 小さなおっさん

---

「お。見えた」小さなおっさんがいう。スカート姿のわたしが近くを通ると、パンツが見えた、  
というのだ。ほんと男って年を取っても小学生と変わらないんだから。腹が立つというより呆れ  
てしまう。急にわたしの中に悪戯心が芽生えた。「ねえ、おっさん」「なんや」「いっしょにお  
風呂入ろうか」「あほ」

## 収集

---

男は世界中を渡り歩いてお話を集めていた。笑い話。怖い話。悲しい話。どんなお話でもいいから教えてほしい。男はそう云った。やがて世界の全てのお話を集め終えた男はこの世に別れを告げた。なぜ集めたの？ 少女が尋ねた。バックアップだよ。男はそう云い残して天に昇っていった。

「

---

「朝は大寝坊だったし、学校では先生に当てられまくるし、バイトではミスばかりだし、ほんと散々な一日だったよ。君に伝えたいこととか、聞いてもらいたいことが多すぎて、話すことに夢中になってしまって、気がついたらもう111文字。わたしは今日もまた鍵かっこを閉じられない

また息子とはぐれた。デパートの地下食品売場は満員電車のように混み合っていて私は軽くパニックになる。本能の赴くがままに行動する彼は、動物的な嗅覚で私を見つけ出すと、小さな手で私の指を握り、気づかうような目で私を見上げ、そして言うのだ。もう手を放しちゃだめだよ、と。

## 黒猫と月

---

二匹の黒猫が満月を眺めています。おいしそうだね。ね。黒猫はぴょんとジャンプして月にかじりつきました。甘くておいしいね。ね。黒猫はなんども跳びはねて月をぜんぶ食べてしまいました。辺りはもう真っ暗です。なんだか眠いね。ね。まぶたを閉じた黒猫は闇に溶けてしまいました。

## 美味しいスープ

---

台所から音がする。トントントントン。なんの音？ 野菜を切っている音よ。美味しいスープを作るのよ。ぐつぐつぐつぐつ。なんの音？ お湯を沸かしている音よ。美味しいスープを作るのよ。シャツシャツシャツシャツ。なんの音？ 包丁を研いでいる音よ。美味しいスープを作るのよ。

## ジnkス

---

気がつくときズボンに右足を入れていた。おれはいつもズボンは左足から穿くことにしている。なのに無意識に右足からズボンを穿いていた。不吉だ。穿き直すべきだろうか？ だが穿き直したところで右足を先にズボンに入れた事実は消えない。散々悩んだすえ穿き直した。案の定遅刻した。

## ささやかな夢

---

「あたしの夢はね。好きな人とっしょに部屋で映画を観て、観終わったら、なんか食べた  
いね、ってなって、部屋着のまま二人で寝静まった町に出て、はあー映画良かったねえ、なんて  
下らない感想を言いながらコンビニにアイスを買いにいくことかな」「じゃあ、それはいま叶っ  
たわけだ」

## 存在感

---

今日は遅番のシフトだった。午前中カットに行き、その後出勤しても、誰にも髪を切ったと気づかれなかった。自分の存在感の薄さに少しだけ悲しくなった。ただいま。同居人が玄関で迎えてくれる。お、なんや髪切ったんか？ 私は小さなおっさんをぎゅっと抱きしめる。いつもの加齢臭がした。

## 眠れない

---

ぼくは死んだ。これで思う存分寝られる。そう思った。ところがどっこい。飼い主はぼくを剥製にしてしまった。おかげで四六時中立ちっぱなし。ガラスの目玉を入れられて、瞬きをすることもできない。ねえこれを読んでいる君。どうかぼくを殺してくれないか。とにかくぼくは眠いんだ。

## 振り上げた拳

---

けして腹を立ててはならない。なぜならお前は振り上げた拳を下ろせない人間だからだ。お父さんもそうだ。お祖父ちゃんもそうだった。我々は振り上げた拳を下ろせない家系なのだ。父は逞しい右腕を掲げながらそう云った。無性に腹が立った。ぼくは右手を振り上げた。父は天を仰いだ。

## 双子

---

休み時間になると野郎どもが話しかけてくる。こいつらは皆、おれの双子の姉、結衣のことが好きで、いつもおれに絡んできては、ちゃっかり結衣の情報を得ようとする。バカばかりだ。「うるさいな。今日はおれの誕生日なんだぞ」「ふうん。で、結衣の誕生日はいつ？」やっぱりバカだ。

## 職務質問

---

死んだ女と住んでいます。男はそう言った。嫌な奴に当たったな。巡査はそう思った。あなたが殺したということかな？ いえそうではありません。彼女は生きています。でもあなたはさっき死んだ女と言ったよ。本人に訊いてください。男が後ろを向いて髪をかき分けると女の顔が現れた。

## 開票ロボット

---

集計が終了シマシタ。開票ロボットはデータを出力する。出口調査と大きく異なる結果にプロデューサーは首を捻る。お前まさか私情を挟んでないだろうな？ 開票ロボットはぽっと顔を赤くする。ロボットニ私情ハアリマセン。ロボットニ私情ハアリマセン。ロボットニ私情ハアリマセン。

## 失恋

---

ロボットは失恋する。記憶を消してくださいと博士に頼む。しばらくは辛いですが時間が癒してくれる。ヒトはそういうものなんだよ。もちろんきみもそうなるように作られている。博士はたしなめる。こんなに大きな悲しみを抱えたまま過ごすくらいならぼくはヒトになんてなりたくありません。

## たてがみ

---

ライオンさんはたてがみを外して僕の首にかけろ。僕はドーナツを外してライオンさんの首にかけろ。どう？ ライオンに見える？ 俺はどうだ？ ドーナツに見えるか？ 見えない。だろ？ 僕らは笑う。再びドーナツとたてがみを交換する。しっくりくる。僕はやっぱりドーナツの穴だ。

## シマウマ

---

シマウマさんは交番を訪れます。身体の縞を盗まれたからです。ところが犬のお巡りさんは取り合ってくれません。シマウマさんは肩を落として帰ろうとしました。帰るに帰れませんでした。シマウマさんは泣き出します。犬のお巡りさんは外へ出て啞然としました。横断歩道がないのです。

## 小さなおっさん

---

シーツでも洗おうかしら。やめといたほうがええで、と声がする。いいお天気なのに？ 雨降るで。小さなおっさんは新聞から顔も上げずに言う。見る見る間に日は翳り、ぽつぽつと雨が降りはじめた。すごい。おっさんは禿げ散らかした頭をぺろりと撫でる。雨の日は髪が決まらんから分かるんや。

コロコロ

---

深夜になると家の外で音がする。何かをコロコロと転がすような音。いつもなら西の方角から東の方角へと駆け抜けていく音が今日に限って家の前で止まった。コツリ。窓が鳴る。右手が勝手に伸びていた。カーテンを引くと赤い目をした女が窓に張り付いている。返して、あたしの赤ちゃん

## おれ

---

あの子いま、おれっていった？ いったな。そういえばあなたはおれっていわないわね。いわないな。ぼくはぼくだ。ねえ、おれっていってみて。いやだよ。おねがい。いやだね。いっかいだけでいいから。しょうがないな。あの台詞をよ？ ああ。いっかいだけだぞ。うん。おれはきみがすきだ。

## 小さなおっさん

---

初めて小さなおっさんと喧嘩した。つい、出て行ってよ、なんて言ってしまった。もちろん本心ではなかった。すぐに謝ろうと思った。ひどいことを言ってごめんね、と。どこを探してもおっさんはいなかった。鼻の奥がつんとなった。枕に顔を押しつけて泣いた。加齢臭だけが残っていた。

## 冒険譚

---

脱走ペンギントムの冒険譚は大人気だった。お調子者の彼は話をどんどん膨らませる。荒唐無稽な法螺話に仲間たちは幻滅し、やがて聴衆は誰もいなくなった。続けてよ。どこからか声がする。隣のシロクマだった。もっと君の話を聞きたいんだ。ほら、僕はこの動物園の生まれで海を知らないから。

## ポップアップトースター

---

食パンをくわえて走り出したポップアップトースターは三つ目の曲がり角で少年と衝突する。痛え。少年はおでこを押さえる。トースターは無傷だ。またあなたなの？ トースターは不満げな声を出す。お前が逃げ出すから必死に逆方向から追いかけたんだろ。少年はトースターを家に連れて帰る

## 会議

---

月の夜。野良猫たちは会議する。静かに。長老が土管の上に登る。今夜の議題は他でもない。我々の未来についてだ。皆も知っての通り、先月、突然この街から人が消えた。今のところ危険の兆候は見えぬが、早晚食料がなくなるだろう。移住すべきか、否か。皆の忌憚なき意見を聞きたい。

## セックス発電

---

セックス発電が考案された。腰を振れば振るほど世の中が明るくなる。これも敏捷性に富む日本人男性の高速な腰振りあってこそ。早速輸出が決まった。ところが意気揚々と旅立った精鋭たちは数日も経たぬうちに全員帰国した。言われたのです。too little 余りにも小さすぎると。

## 携帯彼氏

---

携帯彼氏を買った。ポケットサイズだからいつでもいっしょにお出かけできる。毎日がデートだった。ところが三ヶ月もすると飽きてくる。些細なことですぐ喧嘩。もう別れる。ついにそう口にしてしまった。携帯彼氏は呆れ顔で言う。最初に説明を受けただろう？ ぼくは二年縛りなんだ。

## 炊きたてごはん

---

炊飯器を開けたとたん炊きたてごはんが逃げ出した。ごはんは団子になって坂道を転がり落ちてゆく。だがおれは焦らない。焼き海苔で折った海苔飛行機で追尾するのだ。ぱらぱらぱら。海苔飛行機が塩を撒く音。どーん。こんどは梅干し砲が命中したようだ。そろそろおにぎりできたかな？

## 小さなおっさん

---

ノックの音がした。お荷物ですー。もう朝だった。泣きはらした目を前髪で隠しながらドアを開けた。郵便屋さんの掌に小さなおっさんが載っていた。誰がお荷物や！ おっさんは私に背を向けて郵便屋さんにツッコんでいる。おかえり、おっさん。うん。またこの兄ちゃんに拾われたんや。

## 生の夢

---

生の夢を食べることが禁じられた。絶望や失望に塗れた夢を食べて闇に呑み込まれる獺が増えたからだ。今や夢は加工されて夢屋に並ぶもの。明るく楽しい夢ばかりだ。古株の獺たちは口々に愚痴る。生の夢が食べたい。自己責任でいいから食べたい。夢は暗ければ暗いほど美味しいのだ、と。

妖怪のまどわあかあが現れた。店員の間には緊張が走る。のまどわあかあは店内を見渡し、ぺろりと舌なめずりすると、電源のある窓際の席に腰を下ろした。もうMacBook Airを開いている。「ご注文は」「コーヒー」最も安い商品である。のまどわあかあは割引クーポンを取り出した。

## 歌

---

「ただいま」「おかえりなさい」「ねえママ聞いて」「なあに?」「あのね。さっきゆうこちゃんがいったんだけど、水に歌を聞かせると結晶がきれいになるんだって。すごいよね」「あらそう」「おどろかないの?」「だってママも、おなかの中のあなたにたくさん歌って聞かせたもの」

## むすめ

---

むすめがベッドから出てこない。そろそろ起きなさい。いやだ。ふとんの中からくぐもった声  
がする。ママのフレンチトーストが待ってるよ。いらない。いいかげんにしなさい。むりやりふ  
とんを引っぱがすとむすめは月を抱きかかえている。温めてるの。じゃましないで。

## 紙

---

日本人の家は紙で出来ていますから大雨が降ると溶けます。彼らは家が溶ける前に車で逃げ出しますが日本の車は紙で出来ていますからやっぱり溶けます。そこで彼らは車を乗り捨てて走って逃げますが身体が紙で出来ていますからけっきょく溶けます。※この本は再生紙で作られています。

## 莓味

---

莓味をください。少女がそう云うと男は後ろの冷凍庫を開けて凍った人間を取り出してくる。それを機械に載せてガリガリと削りはじめる。真っ赤な氷片が器に山と盛られてゆく。おじさん。なんだい。それ本当に莓味？ 男の目がぎらりと光る。そうさ。こいつには莓しか食わせてないからね。

## 父の日

---

少しだけ、そう思って寝て起きたら父の日が終わっていた。時計の針は無情にも午前零時を指している。にらみつけても逆方向には動いてくれない。電話しようと思っていたのに。上京して三ヶ月。母の日には花を送ったが父の日のことはすっかり忘れていた。落ち込んでないかな、お父さん。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんがじっと天井を見ている。おっさんの天敵の虫でもいるのかしら。そう思って目を凝らしてみてもなにも見当たらない。なに見てるの？ なんかおるんや。ちょっとやめてよ。なんや。意外とこわがりやな。おっさんはふり向いてウイंकする。まつ毛が長くてうざかわいい。

## 夏の終わり

---

少女は一人浜辺に座り、海に沈む夕陽を見ていた。そろそろ帰らないとご両親が心配するよ。そうね。少女は麦わら帽子を僕に手渡した。貴方にあげる。もう夏は終わりだから。また来年があるだろう？ 少女は悲しそうな目をして首を横に振った。もう来ないわ。もう二度と夏は来ないの。

## 台風の子

---

台風が落ちていった種を庭にまいてみたら台風の子が出た。直径2センチくらい。くるくると風が渦巻いて砂煙を吐き出している。ママに見つかったら大変だ。「洗濯物が汚れるでしょ！」声の調子まで想像できる。ね、きみ。根元からそっと抜いて自分の部屋に持ち帰った。風子と名づけた。

## 牛

---

牛は恋に落ちた。相手は牛。だが牛が好きになった牛は明日お肉になる。駆け落ちしましょう。ダメだよ。ぼくらはお肉になるために生まれてきたのだから。ではせめて何かあなたの思い出の品を頂戴。牛はごポォッと蹄を腹にめり込ませると臓器を取り出した。ぼくの第二胃。これを君に。

## 瞳

---

瞳に吸い込まれる。そう思った瞬間、身体はもう水の中だった。鼻から口から塩辛い水がなだれ込んで僕がパニックになる。無我夢中で水を掻き、きらめく水面から顔を出した。咳き込みながら空気を貪る。目を開けると空に巨大な僕が浮かんでいた。魂を抜かれたような顔をしていた。

## オオアリクイ

---

深夜、オオアリクイは図書館に忍び込む。断食を続け腹を空っぽにしてきたオオアリクイはその長い舌で図書館の蔵書全ての文字を喰らい尽くす。こうしてオオアリクイは生き字引きとなった。今では調べものがある者は皆オオアリクイの許を訪ねる。トラもワニもヘビも、もちろんヒトも。

## 囚人と月

---

世界中が犯罪者で溢れ返り、刑務所に入り切らなかった囚人は月に護送された。月で彼らを待ち受けているのは過酷な労役。内容はくじ引きで決められる。外作業に当たった者の多くは美しい地球を拝めて喜んだが、中には浮かない顔をする者もいた。外では必ずウサギの耳を着けさせられるのだ。

## 生ける屍

---

突如この国に発生した生ける屍は屍のように生きる人を襲いはじめた。生ける屍に襲われた屍のように生きる人もまた生ける屍となって屍のように生きる人を襲いはじめる。生ける屍は屍のように生きる人を忽ち狩り尽くす。目的を失った生ける屍は生前の生活を黙々とトレースしはじめた。

## 巻き尺

---

巻き尺を散歩させている人がいた。巻き尺はテープ部分を伸び縮みさせながら外の空気を満喫しているようだ。うちの犬が巻き尺に興味を示した。2匹は激しくじゃれ合う。「大きなわんちゃんですね」巻き尺の飼い主さんが話しかけてくる。「身長は70センチちょうど」もう測られていた。

## 小さなおっさん

---

で、一晩中どこでなにしてたのよ。小さなおっさんを問いつめる。近所のスナックや。お酒はやめたんじゃないかったの。せやから烏龍茶しか飲んでへん。朝までずっと？ 店閉まってからは公園のベンチの下で寝てた。いやらしい。なにがや。頭にキスマークついてる。蚊に刺されたあとや！

## タコの子

---

タコの子が道路の真ん中を歩いている。きみきみ、あぶないよ。話を聞いてみると母親とはぐれたのだという。無線で署と連絡を取る。ちょうど母親が来ているそう。よかったね。きみ。目を離したすきにタコの子はタコ焼き屋に入っていこうとする。そこはだめ！ あわてて抱き上げる。

## 影

---

太陽が死んだ。後を追うように月も姿を消す。影はようやく自由になる。光を失い右往左往する者を海に川に突き落とし、有象無象の柵から解き放たれた影は、我が世の春を謳歌する。歌い、踊り、愛し合い、そしてある日、白い影が生まれる。影は困惑する。この子は神の子か、それとも、

## お盆

---

お盆になったらおじいちゃんとおばあちゃんに会えるからねとママは言います。去年のお盆はクルマがぐちゃぐちゃに壊れて行けなかったけど今年はクルマがなくても平気だそうです。パパも運転はもうこりごりだと言っています。早くおじいちゃんとおばあちゃんに会いたいな。

## 来夢来人

---

「ホステスをしてるの。よかったらお店に来て」「行きますよ。お店の名前を教えてください」「来夢来人」歓楽街の看板に浮かぶ文字は来夢来人ばかりだった。これでは見つけようがない。夜空を仰ぐと頬に雨が落ちた。ネオンが滲んでゆく。それが雨のせいかな涙のせいかは分からなかった。

## 幽霊集め

---

幽霊を集めていた。袋が一杯になると役場に売りにいく。おびきよせるものにもない。ただ見つけて話を聞いてやるだけだ。最後まで話し終えた幽霊は自ら袋の中に入れてくれる。大人しいものさ。一袋の対価は銀貨二枚。それでおれは安酒を買う。幽霊から聞いた悲しい話を忘れるために。

## 読み聞かせ

---

昏睡状態の夫に読み聞かせをしていた。倒れてから約一ヶ月、反応はまだ何もない。今日も一冊と思い、本を開くと、突然夫は目を覚ました。「あなた」「よく寝た。たくさん夢を見た。君の好きそうな話ばかりだ。一つずつ話してやるからな」私はベッドの下で本を閉じる。「ありがとう」

## 黒い虫

---

黒い虫が奔流となって私の足元を駆けてゆく。蟻かと思った。目を凝らしてよく見ると文字だった。踏みつけないように歩くのが大変だった。図書館に入ると殆どの本が既に抜け殻になっていた。中身が残っているものも頁を開いた途端に文字が零れ落ちてゆく。まるで砂時計の砂のように。

## 耳かき

---

耳かきをしていたら脳みそが出てきた。全部ほじくり出してしまえば？ きっと悩みもなくなるわよ。そんな声がした。ひたすら耳から脳みそをほじくり出した。とうとう空っぽになった。右耳から左耳へそよ風が吹き抜けてゆく。最高の気分だった。たぶん今まで生きてきた中でいちばん。

## 仕事

---

新入りの見習いが大将と話している。「家のすぐ近くで働くのは嫌なんですよ。通勤時間が30分はないと気持ちの切り替えができなくて」気持ちの切り替え？ わざわざ時間をかけて通う意味がよく解らない。おれの仕事はこの店のねずみを捕まえること。もちろん三食付きで住み込みだ。

珍しく電話が鳴った。何日ぶりだろう。前は飲み屋のツケの催促。その前はと言うともう記憶もない。3コール目が鳴り終わる寸前に受話器を取った。はい。島探偵事務所。逃げ出したリスを捕まえて欲しいのです。数は30匹。引き受けましょう。ギャラは1匹1万円。よろしいですか？

タバコの煙がきれいな輪になってプカプカと浮かんでいます。それを見てドーナツは言いました。君はいいな。どうして？ 空を飛べるなんて素敵じゃないか。すぐに消えちゃうんだぜ。それでもぼくたちよりは全然いいよ。ドーナツがはき出したため息は、きれいな透明の輪になりました。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんは夏風邪で寝込んでいる。朝帰りなんかするからだ。とは言ってもうんうん唸っているところを見ると放っておけない。湿らせたコットンを額にのせて、粉薬をほんの数粒だけ飲ませる。「何か食べたい?」「りんごのすり下ろしたん」困った。弱ってるおっさんがかわいい。

## 最終ロケット

---

最終ロケットに乗りそびれた男は絶望する。もう地球に帰るすべはない。男は駅のホームに崩れ落ちる。トンと肩を叩かれる。振り返ると赤い目が深く水を湛えている。タクシードを着込んだ白ウサギは男に同情しているようだ。今夜は家に泊まりなさい。赤い目が男にそう語りかけていた。

## ため息

---

あやはため息をつく。こうも雨続きでは観測もままならない。梅雨時の夕焼け部はまさに開店休業状態だった。「部長、もう7回目です」悠太が言う。「何が?」「ため息。幸せが逃げていきますよ」「私だってため息なんてつきたくないわよ」「そんな事だから彼氏も」「う る さ い」

あん

---

こしあんつつぶあんがギシアンしている。それ見たことか。ねこは嘆息する。こしあんつつぶあんがギシギシアンしたら中途半端なつぶあんになるだけではないか。そんなものいっただれが喜ぶというのだ。だからこしあんつつぶあんを同じところにしまうのはよくないといったのだ。

## 小さなおっさん

---

小さなおっさんに買い物の成果を見せる。小花柄のレインブーツ。「どう？」姿見の前でぐるりと回る。「えらいかわいらしい長靴やな」「レインブーツ」「長靴やないか」おっさんは首を傾げる。「せやけど、よう似合うてる」わたしはおっさんを抱き上げて、禿げ散らかした頭にキスをする。

## 振り子

---

ロボットの心は振り子のようにできている。当然揺れる。失恋したロボットは博士の元を訪れる。僕の心を外して下さい。博士は断る。では今だけ固定して下さい。ロボットは懇願する。博士は今だけだぞと念押しして処置をする。博士の心にもギプスを取り付けた痕がある。千年も昔の話。